

○鍛冶幸昌傳

加越能鍛冶由來考に云ふ。幸昌は加州藤嶋友重の流にて、幸昌五郎右衛門と號す。其子二代幸昌加兵衛と云ひ、其子三代幸昌藤右衛門と云ふと。刀鍛冶系圖には、兼延藤左衛門、天文之頃加州に居住し、其子兼裏五郎助、其子幸昌加兵衛、其子幸昌藤右衛門貞享之比在生。とありて、貞享元年八月の鍛冶取調書に、幸昌を下作の中に載せたり。享保五年幕府への上申書に、幸昌藤右衛門、加州藤嶋友重流にて、祖父幸昌五郎右衛門より當幸昌まで三代家業相續、今以打物細工仕。と載せられ、同年正月幸昌藤右衛門の由緒書に、祖父幸昌五郎右衛門、當國藤嶋友重之弟子筋、信友茂左衛門之弟子にて、萬治三年病死。父幸昌加兵衛、微妙公の時打物被仰付、延寶六年病死。とあり。此の子孫連綿し、寶曆元年の取調書に、幸昌木下藤右衛門と見え、天明三年の飛鳥川記に、御刀鍛冶二拾俵三人扶持鍛冶町木下八大夫幸昌とあり。

○鍛冶包廣傳

享保五年幕府への上申書に、包廣仁助は、幸昌藤右衛門之

甥にて、藤右衛門より致傳打物細工仕。と載せられ、同年正月の由緒書にも、を幸昌藤右衛門に細工習請くとありて、幸昌の別家也。此の子孫連綿し、寶曆元年の取調書に、包廣木下藤助とあり。

○鍛冶兼裏傳

刀鍛冶系圖に、兼延藤左衛門、其子兼裏五郎助、其子幸昌加兵衛、此弟兼裏彦九郎、末退轉。とあり。按ずるに、貞享元年八月の鍛冶取調書に、幸昌兼裏を下作の中に載せられた、享保五年の取調書等に其の名なし。既に絶えたるなるべし。是も幸昌の別家也。

○鍛冶信友傳

刀鍛冶系圖に云ふ。元祖信友、京信國之末、天正十二年加州に來住す。二代信友、慶長・元和之頃也。三代信友茂左衛門、寛永の頃也。四代信友平右衛門、慶安之比也。五代信友伊兵衛、貞享之比存生。とありて、貞享元年八月鍛冶取調書に、信友をば中作の中に載せたり。享保五年幕府への上申書に、信友太郎右衛門、加州藤嶋流にて、父信貞太郎右衛門より家業致相續、今以打物細工仕。と載せられ、同年

正月信友太郎右衛門の由緒書に、父信貞太郎右衛門は、當國藤嶋流善好信長二助の三男信友茂左衛門の弟子にて、寶永二年病死。とあり。此の子孫連綿し、天明三年の飛鳥川記に、御刀鍛冶二拾俵鍛冶町松本太兵衛信友、二人扶持松本左兵衛信友、二人扶持松本七郎泰平と載せたり。是親子なるべし。

○鍛冶重繼傳

刀鍛冶系圖に云ふ。重次八大夫、越前住上野守貞次相傳、寛永之頃越前より加州に來住。二代重繼八大夫、貞享之頃在生。とあり。享保五年正月鍛冶町鍛冶長右衛門貸屋越前屋吉兵衛の由緒書に、祖父重繼八大夫、越前下坂康繼流伯耆守貞次弟子にて、八十年許以前金澤へ罷越、刀鍛冶仲間へ相加り、打物御用相勤、元祿元年病死。父重繼八大夫、三十年以前より打物御用相勤、正徳四年病死。當重繼吉郎兵衛は、父八大夫より習受居候處、勝手困窮、細工道具等所持不致に付、刀鍛冶差止罷在。と記載せり。此の由緒書に據れば、鍛冶系圖は誤り多かるべし。

○鍛冶信貞傳

刀鍛冶系圖に、信貞太郎右衛門、慶安之頃より貞享之頃存生、信友茂左衛門相傳。と見え、貞享元年八月鍛冶取調書に、信友弟子信貞と下作の中に載せたり。享保六年の取調書に、信貞太郎右衛門とありて、享保までも其の名を載すれば、二代目ならんか。

○鍛冶忠吉傳

刀鍛冶系圖に云ふ。忠吉六兵衛、寛永之頃家忠に相傳。二代忠吉六右衛門、貞享之比存生。とあり。貞享元年八月鍛冶取調書に、二代忠吉とて下作の中に載せたり。此の後子孫絶えたるか、享保の調書等に其の名なし。

○炭宮兼春・兼則傳

兩鍛冶數代連綿して、炭宮ものと稱し、兼若・勝國などとひとしく賞美せり。此の傳は三社炭宮川の條下に載せたり。

○一代鍛冶傳

加越能刀鍛冶系圖に記載せし一代鍛冶の分、其の名如左。

兼 先

天正の頃濃州關より加州に來住す。

兼 元